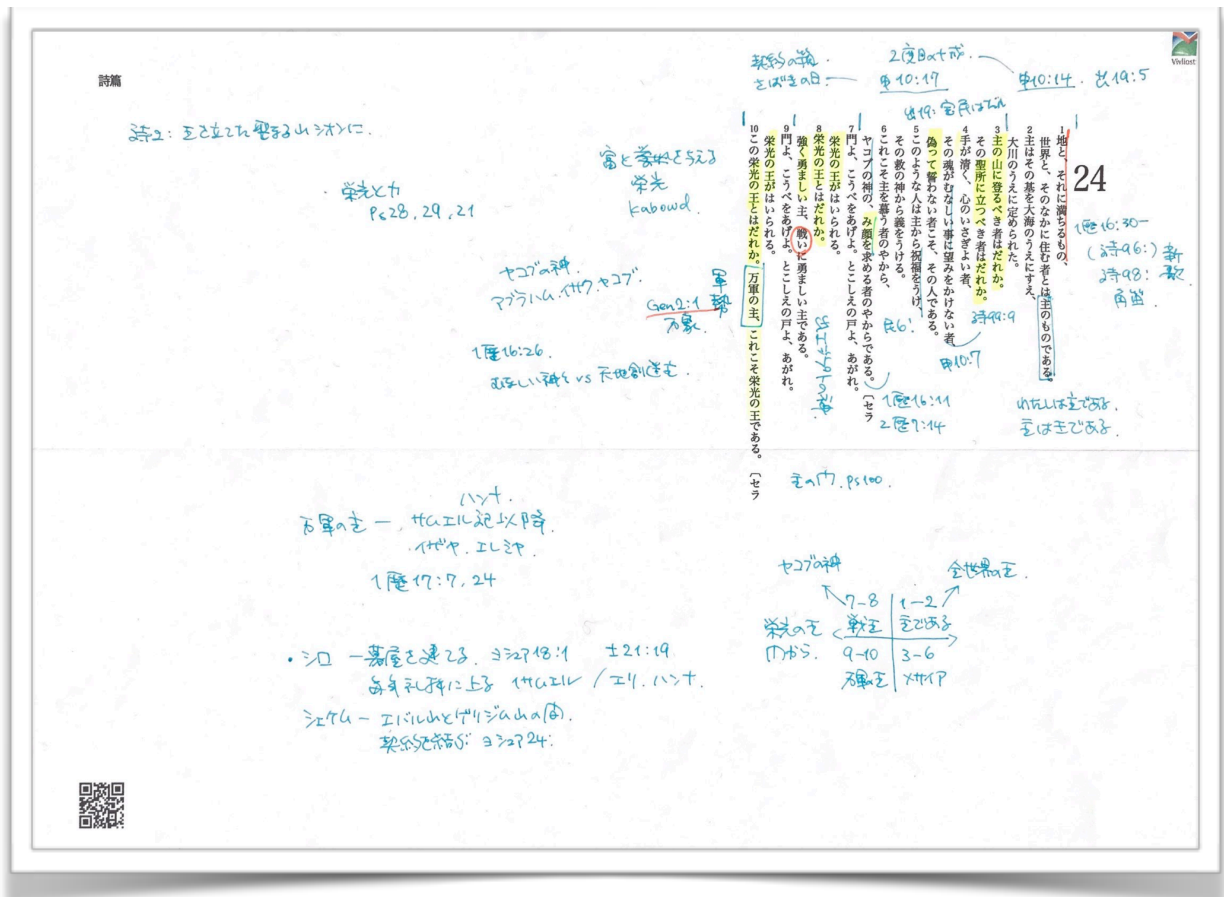




詩篇24篇



詩篇24篇の分析をしてきました。24篇を見ると…何も考えないで読んでしまうと、15篇に似ているよね、と。「主の山に登る者はだれか。聖所に立つべき者はだれか。」という言い方があって、答えがあるなあ。急に「栄光の王」が入ってくるというところが、15篇に似ているものにくっついてくると。出だしの「世界とそこに住む者とは主のものである」というこの1,2節は何だろうみたいな形ですね。19篇にも似ていますよね。19篇で「天と地の栄光」の話をして、急に「主のことば」の話をして、最後に「誰が自分の罪を悟ることができるのか」という3つに分かれていて、何だろうこの3つのつながりは…というような詩篇がありますよね。その中の一つだと思います。24篇を見て、1,2節を見て、慣れていないよねと思います。全体の配列の中での位置付けもそうですし、他の箇所を連想するところもいっぱいあるのですが、全然慣れていないのでバラバラに見えてしまうというところです。

24篇を見ると、第1巻の12篇から31篇まで、19篇から31篇までのこのこに(24篇)はいます。このつながりは何だろうというのを分析しているものがあります。いま特に、24,25,26,27の分析、この並行を、19篇から31篇という詩集の中でのこの4つ(24,25,26,27)の位置付けを見たりしています。その中の24篇ということです。

24篇を見て「地とそれに満ちるもの」という言い方は、第1歴代誌16章の中に「天は喜び、地は楽しみ、海とその中に満ちるもの」天と地と海と畑と木もみんな喜んでいてるところがあります。「主のものである(詩篇24篇)」ということですが、ここ(第1歴代誌16章)は「主は王である」という言い方になっていたりしますので、24篇1,2節を見たときに、「私は主である」「主は王である」ということを連想しないといけないでしょう。

第1歴代誌16章は、96篇に、ほとんどそのまま引用されていきますけれど、98篇にも「海とその中に満ちるもの」があります。96,97,98,99という似ている詩集がありますけれど、「主は王である、主は聖である、その聖なる山に向かってひれ伏せ、主は王である、新しい歌を歌え、新しい歌を歌え、主は王である」似ているところがあります。

96篇の中に「この天、地、海」、98篇の中にも「海、世界、川、山」があります。その出だし(24篇)のところですよ。それで、「主の山に登る、聖所に立つべき者はだれか」と99篇にあります。「主は聖なる山、足台のもとにひれ伏せ、主の足台、主のおられる聖なる山、ケルビムの上の御座についておられるシオンにいる主に歌う」。「その聖なる山に立てるのは誰なのか」ということなのです。

聖所に立てないのですね、普通は。それは、十戒を与えられた出エジプト記20章の前の19章全体は、「私たちは神様の前には立てません。神様のみことばを聞きたくない。恐ろしい。民はシナイ山に登ることはできません。」登って来なさいと言われたのですが、登ることはできませんと言って、「主が火のいなずまと厚い雲、ラッパの音、かみなりで答えてくださったその前に立つことはできません」と言っているその山に登る。聖所に立てる者は誰なのですかと。本当は、わたしの宝の民だから登ってこれるのですね。でも、登ることはできませんと。それで、十戒、宝物をもらうわけです。

この主の山に登る聖所に立つべき者は誰ですかというと、「手が清く、心の清く、魂がむなしい事に望みをかけず、偽って誓わない人」こういう人に皆さんなりましょうねと言っている「箴言」ではなくて、「私たちのメサイアはこういう方です」ということをここで宣言している。

「手が清く、心が清い者」というのは、神様ご自身なのですね。それは、2回目に十戒が与えられた、特に申命記10章の箇所、40日40夜山にいて、もう一度いただきました。「あなたがたの神である主は、神の神、主の主、大いに力ある恐るべき神にいまして、人をかたより見ず、また、(手が清い)まいないを取らず、みなしごとやもめのために正しいさばきを行い、寄留の他国人を愛して、食物と着物を与えられるからである。(申命記10:17,18)」「手が清く心が清い、偽って誓わない、このまいないを取らず(詩篇24)」の神様に似ているメサイア、本物の王様は救いの神から義を受ける。主を慕う者、御顔を慕う者、これがダビデが歴代誌16章で歌っているこの神様について歌っているのと同じようなことをしてくれる主が王であることをあらわす王であるメサイアが来る。これが、聖所に立つべき者ということです。

歴代誌16章で、「その御顔を慕い求めよ」栄光をたずね求めなさいと言われているところですね。その御顔を慕い求める者は、栄光の王である。この栄光の王が入ってくる。門を開けて栄光の王がいよいよ入ってくるというところに、戦いに勇ましい主、万軍の主という言い方がここ(24篇)に出ています。

新しい歌を歌って角笛の音の中に入ってくるのですね。98篇にラッパと角笛の音に合わせて入ってくるわけです。ラッパと角笛の音に合わせて入ってくるのは、神様ご自身ですね。山の上で(出エジプト記19章)。それで、メサイアもラッパと角笛の音に合わせ

て入ってくる。聖なる飾り物をつけてその前にひれ伏すという新しい歌を歌って、さばく神様を待っているというところから始まって栄光の王が入ってくるというところです。

4つの段落に分ける。(前は)3つに分けていました。1から2、3から6、7から10でしたが、7から10を2つ(7-8,9-10)に分けてみました。(1-2)私は主である、(3-6)主のメサイアがこれです、(7-8)栄光の王、(9-10)栄光の王ということです。

聖なる山シオンに立てているわけですね。メサイアの詩篇である2篇でも「わたしはわたしの王を立てた、わたしの聖なる山シオンに、主に油注がれた者」とあります。聖なる山に立っている王様が入ってくるのですけれど、「私は主である、全てわたしのものである。私は主である。その主が王を任命する」これが2番目、3から6。そして、7から8、9から10と分けたときに違いが、「戦いの主」と「万軍の主」という言い方があります。「戦いの主」と言っているほうは、出エジプト記15章に主は戦いの主である、主はいくさ人という言い方があります。この主はいくさ人というのと、いくさ人というのが同じことばのようです。まずこちらが(7-8)、戦って勝つ。戦いの神であるということです。

万軍の主と言ったときに、万軍と訳されていますけれど、万軍というのがよくわかりませんね。軍勢、軍であることは軍である。イスラエルの軍のことを万軍とも言うし、神様の軍だから万軍とも言います。天の万象という言い方が創世記2章にあります。「天と地とそのすべての万象が完成された」。万象が万軍ですね。天のみ使いたちも軍勢ですから、万軍なのですね。天の星々、4日目の光るもの、星、月、太陽も天の軍勢ということも言えるわけです。ですから、天の軍勢、全世界、被造物すべては主のものである。その創造主である神様の栄光と、メサイアが与えられて、(ヤコブの神ですから)民を導き出すこの戦いの王様、戦って連れ出す王様ということで、戦いの王様メサイアということと、全世界の王であるということが、外側(1,2/9,10)と内側(3-6/7,8)の違いかなというように見ました。

それで、この神様、メサイアがいよいよ入ってくるというのがこの詩篇ということになると思います。むなしい神々に対して、天地の創造主だったのですね。それは、歴代誌16章の「もろもろの民のすべての神々はむなしい。しかし、主は天地を創られた。」何ももっていない空っぽな神々と、全部を持っている万軍の主の戦いがあって、その栄光の王が入ってくる。ヤコブの神という言い方は、アブラハム、イサク、ヤコブの神ということを短く言っているのだろーと思いますけれど、アブラハムの約束を果たしてくださる神様の御顔を慕い求めているということが、御顔の栄光を求めているということで、この分析をして4つに分けてみるのが良いのではないかと考えています。